HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小特集：シンポジウム「社会の中のiPS 細胞 ： 私たちは先端科学技術とどう向き合えばよいのか」に寄せて
Citation	科学技術コミュニケーション, 13, 111-112
Issue Date	2013-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52858
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	journal article
File Information	JJSC13_009.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小　特　集：シンポジウム「社会の中の iPS 細胞 ～私たちは先端科学技術とどう向き合えばよいのか～」に寄せて

北海道大学科学技術コミュニケーション教育研究部門は，2013年3月9日，シンポジウム「社会の中のiPS細胞 ～私たちは先端科学技術とどう向き合えばよいのか～」を開催した．この小特集は，3名の登壇者に，シンポジウムでの発表内容をもとに加筆修正してもらった原稿を集めたものである．

シンポジウムの趣旨：

昨年の山中伸弥氏のノーベル生理学・医学賞受賞を巡って，メディアは様々な報道を繰り広げてきたが，その喧噪の中で，iPS細胞の具体的な研究内容とその臨床応用の可能性，社会的意義，あるいは広く再生医療の問題について，一部の専門家や高関心層の間を除いて，腰を落ち着けて考えたり，議論したりする機会がなかなか生まれていないのも現状である．

もともとiPS細胞の研究は，生命はなぜかくも強力な再生機能を持つのか，という科学的な問いから始まったものだが，医療の現場から，その研究成果を再生医療へ応用できないかという強い期待が生まれてきた．これは難病患者とっては切実な問題だが，研究から臨床応用までの道のりは決して平坦ではないのも事実である．また，研究には多額の公的資金が投じられており，そのことの妥当性・公共性が問われる一方で，国際的な研究開発競争の中で日本がどのような戦略をとるべきかという課題も浮かび上がってきている．

さらに，やがて再生医療が実現した際には社会に大きなインパクトをもたらすことが予想され，場合によっては私たちの人間観をも変えてしまいかねない．このような将来展望に対して，期待が寄せられるのと同時に，安全性の問題や，様々な倫理的問題も懸念されている．

私たちは，iPS細胞の研究や臨床応用がもたらす様々な可能性と，社会がそれにどう向き合えばよいのかという問題について，どのように伝え，考え，議論すればよいのだろうか．あるいはより広く，「先端科学技術と社会との関係」についてどのように考えていけばよいだろうか．これは，すぐれて科学技術コミュニケーションの問題であるといえる．

今回のシンポジウムでは，「iPS細胞をめぐる諸問題」を科学技術コミュニケーションの観点から捉えたときに，どのような課題，教訓が得られるのかを，研究者やメディア関係者をゲストに招き，多様な切り口から議論したいと考えた．

シンポジウムの概要：

シンポジウムのゲストには，八代嘉美氏（慶應義塾大学医学部特任准教授（当時）），栃内新氏（北海道大学理学研究院教授），八田浩輔氏（毎日新聞科学環境部記者）を迎え，それぞれの立場から，私たちの社会におけるiPS細胞研究の意義と課題について語ってもらった．

シンポジウムの前半では，ゲストの三氏にそれぞれ話題提供を行ってもらった．まず八代氏には，議論のベースとなるiPS細胞・再生医療についての基礎的な解説を行ってもらった上で，iPS細胞研究・再生医療の現在と将来展望について語ってもらった．次に八田氏には，iPS細胞研究・再生医療を取り巻く患者，医療従事者，企業といったステークホルダーの現状について，報道の第一線で活躍するプロフェッショナルの立場から情報提供を行ってもらった．最後に栃内氏からは，発生生物学の歴史という観点から，iPS細胞研究・再生医療を俯瞰したときに見えてくる50年先，100年先の社会の可能性，その時生まれてくるかもしれない私たちの経験したことのない課題について，問題提起をしてもらった．

シンポジウム後半では，会場の参加者からの様々な質問に答えつつ，それぞれの登壇者の話題提供を踏まえた総合討論を行った．討論のテーマは多岐にわたったが，社会的インパクトの大きい先端科学技術に関する専門家と市民のコミュニケーションの場をいかに構築していくか，そのために科学技術コミュニケーターはどのような役割を果たせるか，という点について，数多くの貴重な提案がなされた．

（シンポジウム司会・文責：石村源生（北海道大学科学技術コミュニケーション教育研究部門特任准教授））